**日本財団学生ボランティアセンター**

**2015年度　事業報告書**

**Gakuvo Style Fund**

●　事業概要

本事業は、ボランティアとして、単に誰かの役に立つだけではなく、活動を通して自らが成長し、社会へはばたく人材を育成することを目的として設立した事業である。次の３コースを設定して、学生ボランティア団体に対して資金協力を行う。

1. Colla・vo　協力金：上限20万円

新たな活動展開を図るため、既存の枠組みを超えた組織とのコラボレーションを企画する学生を支援するコース。

1. Yuru・vo　協力金：上限10万円

はじめの一歩を踏み出そうとする学生を支援するコース。

1. Baca・vo　協力金：上限30万円

活動を行う地域で発生している課題解決に、徹底的にのめり込む活動を行う学生を支援するコース。

・Gakuvo　Styleとは・・・・

一般のボランティアとは異なり、ボランティア活動を通してボランティア自身が、日常生活の中では意識していなかった社会問題に気づき、その解決を模索し、行動に移すことによってボランティア自身が成長していくプロセス、およびその成長に重きをおいたボランティアの姿を指す。もちろん、成長するだけでなく、一般のボランティア同様、社会問題を改善していくことも重要である。

●　2015年度の概要

□　第2回Gakuvo Style Fund

1. 応募期間：2015年6月1日～16日
2. 審査内容 1.書類審査　　　：2015年6月17日～7月6日

2.プレゼン審査会：2015年7月26日（日本財団バウ・ルーム）

※Yuru・voは書類審査のみ。

1. 応募団体数 1. Colla・vo　　23団体 （4,319,898円）

2. Yuru・vo 8団体 （　750,144円）

3. Baca・vo 39団体 　（11,443,594円）

1. 採択団体数 1. Colla・vo 13団体 　（ 2,180,000円）

2. Yuru・vo 7団体 　（　 570,000円）

3. Baca・vo 21団体 　（ 5,800,000円）

1. 審査委員 1. 谷口浩一

（ソニーマーケティング株式会社　広報・渉外部　総括部長）

2. 西尾雄志（日本財団学生ボランティアセンター　代表理事）

3. 西村万里子（明治学院大学　ボランティアセンター長）

4. 松原康雄（明治学院大学　副学長）

5. 渡辺一馬（一般社団法人ワカツク　代表理事）

予 算：22,356,800円

実 績：18,187,054円

主だった支出：協力金(学生ボランティアの活動に対する協力資金)

執行率：81％

**大学協働事業**

●　事業概要

わが国の高等教育に対して大きな変革が求められて久しい。特に幅広い分野での連携が求められ、地方公共団体や大学外の専門機関と連携を図り、多様な教育を先駆的に実践している大学が増えている。

当センターでは、設立当初より、学生時代のボランティア活動が、全人的な人間成長に寄与すると考え、教育改革に積極的な大学やその関係機関と協力関係を構築している。そのなかで、大学の教育力を広く拡充し、学生のボランティア活動及び社会参画の推進を図るのが本事業である。

●　2015年度の特徴的な事業①－大学コンソーシアムひょうご神戸との協働事業

2015年4月、兵庫県下42校が加盟する大学コンソーシアムひょうご神戸と協定を締結した。これをきっかけに、大学の枠を超えたプログラムを組織的に展開することが可能となった。

今年度は、何らかのボランティア活動に携わっている学生を対象に、「学生ボランティアリーダー養成プログラム」を企画。このプログラムは、他大学の学生と交流し、自らの活動を振り返りながらステップアップを目指すというものである。

様々な専門分野を学ぶ日本人学生や留学生などが参加し、被災住民の方々と交流しながら災害復興のあり方を学んだ。次年度は、継続的に取り組むため、参加した学生たちによる新しいプログラムを実践する予定である。

●　2015年度の特徴的な事業②－立教大学ボランティアセンターとの協働事業

2015年6月に、立教大学ボランティアセンター主催の「国際ボランティア講座I」に協力をし、講義を実施した。これをうけて、今後の協力関係をさらに発展させるため、7月には「学生ボランティア活動推進に関する協定書」を締結し、12月には、第2回目である「国際ボランティア講座II」にて講義を実施した。2回の講義に、延べ54名の学生が参加した。

2015年度に初めて開催した立教大学ボランティアセンター主催「国際ボランティア講座」は、大学のグローバル構想や海外ボランティアに関する問い合わせや相談が多くなっている現状に対応するため、立教大学ボランティアセンターの主催で開催された（後援：立教大学グローバル教育センター、立教サービスラーニング・パイロット運営室、協力：日本財団学生ボランティアセンター、株式会社立教オフィスマネジメント）。

当センターからは、基調講演「違うセカイへ飛び立つことで得られる力」および海外における安全対策などを中心に、講義を行った。また、講座の中では、実際に海外のプログラムに参加をした経験のある立教大学の在学生から体験談を発表した。参加者からは、「海外ボランティアについて知る良い機会であったのと同時に、自分について考えるための機会となった」「体験談がとても刺激的で、ボランティア活動を海外でしたいという思いが強まった」という感想が聞かれた。

今後も、当センターは立教大学ボランティアセンターと協力をして事業を実施していく。

予 算 ：38,947,200円

実 績 ：22,045,858円

主だった支出：旅費、バス諸費用(全国の大学との協働事業、ボランティア実習)

執行率 ：57％（大学協働事業のうち海外派遣を学生ボランティア派遣へ移動したため）

**学生ボランティア派遣事業**

●　事業概要

2011年に発生した東日本大震災を機に始まったのが、学生ボランティア派遣事業である。東北を中心に、これまでフィリピンや広島、茨城県常総市といった災害の被災地で活動を行ってきた。東北の派遣は2011年4月よりチーム「ながぐつ」プロジェクトとして、定期的かつ継続的に行っており、2015年は福島県いわき市を中心に活動した。ボランティア活動だけでなく、学生自らが現地に行くことで得る学びや気づきから、震災を他人事ではなく、自分事にしてほしいという想いの下、派遣を行っている。

●　2015年度の事業　チーム「ながぐつ」プロジェクト

いわき市での活動も3年目を迎え、地域の方々にもGakuvoの存在を認識していただける様になってきた。プログラムとしては、より多くの学生が参加しやすい日程として金曜日夜に出発する週末プログラムを実施。授業がある期間も毎回10名程の学生を派遣することができた。また活動としては、地域の方々が行うイベント等へのお手伝いが増え、より地域に入り込んだ活動となってきている。

新たな試みとしては、「伝える」場を持ったことだ。現地に行ったことで自分の中に芽生えた想いや気づきを、中央区にある協働ステーションが主催する十思カフェにて、「メディアでは語られない被災地のことを現地エピソードから考える地域の防災と減災」をテーマに、一般の方を対象としたトークイベントにて登壇した。「伝える」ことを通し、現地での活動で気づいたものを更に深める機会となった。今後もこうした「伝える」場を設けていきたい。

●　2015年度の特徴的な事業①―体育会の活動

東北へのボランティア派遣は、全国の大学生個人を対象として募集を行い、事業を実施してきた。その形態の派遣に加え、ここ数年は体育会単位で大口でのボランティア派遣を実施している。

大学の体育会は、日々の勉学はもちろんのこと、それぞれの競技スポーツにおいて、昼夜を問わずして厳しい練習を実践している。スポーツは、ただ「する」だけではなく、「みる」、「ささえる」という3つの領域で成立している。そのなかで「ささえる」という領域を実感するため、厳しい練習の合い間をぬってでもボランティア活動の機会を設けたいというリクエストが、大学体育会のコーチや監督から寄せられるようになった。こういった意図にもこたえるため、2015年度は早稲田大学や明治大学の体育会と合同して派遣事業を行った。

2015年度は、以下のとおり活動を行った

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| **活動日程** | **活動団体** | **活動場所** | **主な活動** |
| 2015年  7月4～5日 | 早稲田大学  米式蹴球部 | 福島県  いわき市 | いわき市立江名小学校でのフラッグフットボール教室の開催、いわきオリーブプロジェクトでの農業支援活動 |
| 2016年  2月24～25日 | 早稲田大学  米式蹴球部 | 福島県  いわき市 | いわき市立江名小学校でのフラッグフットボール教室の開催、いわきオリーブプロジェクトでの農業支援活動 |
| 2016年  3月1~3日 | 明治大学  アメリカン  フットボール部 | 福島県  いわき市、  南相馬市 | ゆうゆうファームでの農業支援活動、被災地視察および仮設商店街訪問 |

●　2015年度の特徴的な事業②―水害ボランティア派遣

学生ボランティア派遣では、これまでに土砂災害に見舞われた広島や超大型台風30号（ハイエン）によって甚大な被害に見舞われたフィリピンなどに学生ボランティアを派遣してきた。

2015年9月9日～11日にかけて北関東及び東北地方を襲った記録的な大雨においても、発災直後から情報収集及び現地調整を進め、9月20日より順次学生たちをボランティア活動に派遣した。

この水害ボランティアでは全10陣を派遣し、延べ196名、62大学（内3校は専門学校）の学生たちが全国から集まった。第1～3陣は栃木県鹿沼市、第4陣～10陣は茨城県常総市にて活動した。活動内容としては、決壊した川から流されてきた泥の掻き出し、浸水被害に遭われたお宅から家財道具の運び出しなどを行った。災害直後の被災地に訪れること、被災された住民の方のお手伝いをすることは初めての学生がほとんど。一人一人が「少しでも自分にできることを！」という想いで活動に携わった。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | **1陣** | **2陣** | **3陣** | **4陣** | **5陣** |
| **参加者数** | 24名 | 22名 | 32名 | 13名 | 30名 |
| **参加大学数** | 18校 | 15校 | 21校 | 10校 | 17校 |
| **活動地** | 栃木県  鹿沼市 | 栃木県  鹿沼市 | 栃木県  鹿沼市 | 茨城県  常総市 | 茨城県  常総市 |
| **活動内容** | 水田水路の泥かき | 被災された家屋の片付け、泥かき | 流されてきた物の回収・分別 | 被災された家屋の家財搬出、泥かき | 被災された家屋の家財搬出、泥かき |

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | **6陣** | **7陣** | **8陣** | **9陣** | **10陣** |
| **参加者数** | 10名 | 11名 | 7名 | 26名 | 21名 |
| **参加大学数** | 6校 | 7校 | 5校 | 17校 | 14校 |
| **活動地** | 茨城県  常総市 | 茨城県4常総市 | 茨城県4常総市 | 茨城県4常総市 | 茨城県4常総市 |
| **活動内容** | 捨てられていった瓦礫の回収、分別 | 流されてきた物の回収、分別 | 被災された家屋の家財搬出、瓦礫の分別 | 被災された倉庫の片付け、泥かき、畑の瓦礫回収・撤去 | 被災された倉庫の片付けや家財搬出、泥かき |

●　2015年度の特徴的な事業③―Alternative Leadership Program in Indonesia

2016年2月15日～29日（ジョグジャカルタ）、3月6日～20日（ジャカルタ、バンドゥン）の2回にわたり、インドネシアにて現地受入団体Alternative Projectと協働で、Alternative Leadership Programを開催し、全国から集まった合計17名の日本人と、現地で募集をした9名のインドネシア人が参加した。2つのプログラムの共通した目的は、自分で考え行動する「主体性」、異なるバックグラウンドをもつ参加者と協働することによって得られる「多様性」、共同生活や一つのことを共に作り上げることによって鍛えられる「伝える英語」を学ぶこと。2週間のプログラム中の期間は、全員で同じ場所に宿泊をし、共同生活を送りながら活動した。

2月のプログラムの主な活動は、ジョグジャカルタ市内の低所得者層エリアにある、近隣の小中学生が通う寺子屋でのワークショップの開催。寺子屋に通う子どもが自分の将来を考える力を刺激することを目的として、”Find your talent!”（得意なこと見つけよう！）をテーマとした3日間のワークショップを開催し、書道・音楽・アート・科学などを楽しみながら学ぶワークショップを、ゼロから作り上げた。

3月は、首都ジャカルタとバンドンにて、インドネシアで活躍する社会起業家にインタビューをするプログラムを開催した。現在、インドネシアは経済発展で注目を浴びているが、同時に社会課題も多くみられる。そうした状況を改善するためにビジネスを興し、自分の国を良くしようと知能と情熱をもって取り組む社会起業家も増えている。そのような社会起業家に直接インタビューし、インタビュー内容記事やプレゼンテーションを作成、プログラムの最後に発表した。

予 算 ：48,777,700円

実 績 ：37,384,025円

主だった支出：バス諸費用、旅費(学生ボランティア派遣にかかわる支出)

執行率 ：77％

**セミナー/シンポジウム事業**

●　事業概要

セミナー/シンポジウム事業では、災害ボランティアセミナー、ボランティアシンポジウム、PR力コンテスト「V-1」を開催した。

災害ボランティアセミナーは、災害時に学生がボランティアとして迅速に活動できるよう災害ボランティアの初歩を学ぶ内容となっている。

またボランティアシンポジウムでは、Gakuvoと連携して事業を行なっている大学の学生の活動報告が主な内容となっている。他の取り組みを通して、自分の取り組みを見直す機会をつくることと、ボランティア活動をする学生たちのネットワークを構築することがこの事業の目的である。

PR力コンテスト「V-1」は、学生ボランティア団体を対象にした映像コンテストである。

●　2015年度の事業

災害ボランティアセミナーは、二松学舎大学、早稲田大学、聖心女子大学にて開催した。首都圏の大学が中心であるため、首都直下地震の内容をまじえたセミナーとなった。講師は、NPO法人IVUSA（国際ボランティア学生協会）理事の伊藤章氏、新宿区社会福祉協議会主事の中山岳文氏らが務めた。

ボランティアシンポジウムでは、愛知淑徳大学、福山市立大学、大阪大学、千葉大学の学生らが活動を発表するほか、NPO法人グリーンバード代表の横尾俊成氏によるプレゼン講座も開催され、プレゼンの極意も学べる内容となった。

第6回PR力コンテスト「V-1」2015は、2015年12月19日（土）にHUB Tokyo（東京都目黒区）にて本選を開催した。今回は「ふりかえる音　ふりむく表情」を映像テーマに設定し、全国11団体より応募があった。本選に先立ち開催した映像制作セミナーでは、審査委員長も務めて下さった映像作家・鎌仲ひとみ氏を講師にお迎えし、エントリー団体それぞれにアドバイスをいただいた。本選では、スペシャルイベントとしてクラウドファンディングで有名なREADYFOR株式会社代表取締役CEOの米良はるか氏によるトークイベントを開催。コンテストでは、昨年に引き続きSHANTI SHANTIがグランプリを、ハンセン病問題支援プロジェクトQIAO－チャオ－が審査委員賞を受賞した。

＜2015年度出場団体（本選映像上映順）＞

①「めぐこ」－アジアの子どもたちの自立を支える会－

②早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター公認プロジェクト　Saopopo

③SHANTI SHANTI

④インドワークキャンプ団体　namaste！

⑤ハンセン病問題支援プロジェクトQIAO－チャオ－

⑥DOORS－日越交流プロジェクト－

⑦猪倉農業関連プロジェクト

⑧CROM

⑨アイセック明治大学委員会

⑩学生団体ATMU！

予算：26,094,400円

実績：11,049,387円

主だった支出：バス諸費用(参加学生移動のため)

執行率：42％

※公益認定の後に、新理事の協力を得て行う予定であったボランティアシンポジウムが、公益認定の遅れにより延期になったため。

**インターン事業**

●　事業概要

当センターでは、学生目線から学生ボランティアの支援を行うため、学生インターンが主体となり、様々な事業を実施している。毎年、首都圏の大学から、約10名の学生インターンを募集し、4月から翌年3月までの一年間、当センターで活動をする。

学生インターンは、社会問題をとりあげるインタビュー誌の制作、PR力コンテスト V-1の企画・運営、その他自主イベントの企画・運営を行う。

●　2015年度の事業　インタビュー誌『EMAC』の発行

2015年度のインターン事業では、社会問題をとりあげるインタビュー誌『EMAC』の制作、PR力コンテスト V-1の企画・運営、東北×ボランティアについてのイベント「ながぐつ＋～シェアして学ぶ東北とボランティア～」の開催に取り組んだ。

『EMAC』は、当センターのインターンである現役大学生が、現代社会における現象や問題を見つめ、深く考えるための冊子。各号の特集テーマに対し、そのテーマを考えるためにふさわしい第一線で活躍している人物・起業・団体にインタビューをし、現状への理解を深め、課題にどのように取り組むかのヒントを提示できることを目的として、制作をしている。研修を受けたインターンが記者となり、様々な人にインタビューを行った。

2015年度は、8月に『EMAC第8号　僕たちのサブカルチャー～転換期を迎えた日本とニッポンの文化』、12月に『EMAC第9号　あたり前を疑え～社会問題が見えてくる身近なモノ』を発行した。

●　2015年度の特徴的な事業①―東北 × ボランティア「ながぐつ＋（プラス）～シェアして学ぶ東北とボランティア～」

学生インターンが自らの想いをカタチにすることを目的に始めた。今年度のインターンには、当センターが主催する学生ボランティア派遣チーム「ながぐつ」プロジェクトに参加した者も多く、「東北のために何かしたい」という想いが目立った。そうした背景から東北に対しての想いをカタチにしていくことを目的に本イベントを実施した。

百聞は一見にしかず。ということで、土台作りも兼ねて、インターン合宿を福島県で行った。

チーム「ながぐつ」プロジェクトの活動などを入れ込みながら、いわき市・郡山市・福島市で東日本大震災について学んだ。この合宿を基に、自分たちができるアクションを突き詰めていき、「ながぐつ＋～シェアして学ぶ東北とボランティア～」の開催となった。

　イベントでは、復興支援に携わっている一般社団法人まるオフィス代表理事の加藤拓馬氏の講演や、ボランティア経験者によるパネルディスカッション、災害クロスロードというワークショップなどを行った。震災から5年を迎えるにあたり、参加者も運営側のインターンも、改めて震災についてそしてこれから自分たちができることを考え合う時間となった。

予 算：30,501,200円

実 績：21,128,895円

主だった支出：委託費(EMAC発行に際し、プロのライター、カメラマン、編集者を入れて編集を行ったため)

執行率：69％

EMAC取材として見込んでいた旅費、交通費を、近県取材によって節約できたため。

**教育活動支援**

* 事業概要

　当センターが推進する学生ボランティア活動は、学生や高等教育機関にとって、社会貢献に寄与するという意味合いとともに、学生の成長や教育効果上の意義という二つの側面をもっている。その双方が重要であることはもちろんだが、本事業ではおもに後者にスポットをあてたプログラムを実施した。

* 2015年度の事業

2015年度は、白百合女子大学、聖心女子大学と事業を展開した。宮城県亘理町、気仙沼市唐桑町、岩手県陸前高田市をフィールドとし、亘理町に関しては白百合女子大学、聖心女子大学双方の学生を対象とし、唐桑町、陸前高田市は聖心女子大学の学生のみで行った。実施においては、生業(なりわい)をキーワードとし、亘理町では農業（トマト・いちご栽培）、唐桑町では漁業にスポットをあてた。とくに唐桑町では、生業というテーマに加え、ボランティアをする方ではなく、ボランティアを受け入れている側の視点を取り入れた実習プログラムとした。具体的には、震災直後から当センターをはじめとしてボランティアの拠点を提供してきている地元の方のお話を聞き、受け入れ側の生の声を聞き、受け入れ側の思いを学ぶ内容とした。また陸前高田市では、生業というテーマに加え、動く七夕祭りのお手伝いのボランティアプログラムも実施した。

予　算：2,020,000円

実　績：1,389,155円

主だった支出：バス諸費用

執行率：69％

**情報発信**

学生ボランティアのリーチを重視し、学生のネット環境がPCよりもむしろスマートホンであることから、スマートホンでも閲覧しやすいHPの開発に力を入れた。

また当センターの全体像が一目でわかるような説明資料として、報告冊子を作成し、全国の大学を中心に発送し、広報宣伝につとめた。

学生をターゲットとして情報発信と、大学教職員をターゲットとした情報発信のツールが異なることから、双方に対応できる情報発信を行った。

予 算：10,224,000円

実 績： 5,896,384円

主だった支出：委託費、印刷製本費(HP作成のため)

執行率：58％(主だった支出であるHP作成、報告書作成ともに、コストパフォーマンスのよい業者の選定につとめたため)

参考）

**学生委員会**

学生ボランティア支援に際し、不可欠なのは学生自身の視点である。その視点から学生ボランティアのニーズを吸い上げる目的で、学生委員会を発足させた。大学ボランティアセンタースタッフ、留学生、Gakuvo事業参加者など多彩な顔ぶれで活発な意見交換がなされた。

自分の行なっている活動内容や自己紹介から始まり、学生ボランティアが求める支援とは、Gakuvo事業の改善点とは、といった内容で議論が始まった。学生ボランティアのニーズとしては、正確なボランティア情報提供があげられ、またGakuvo事業に関しては、具体的なコンテンツまで含めた改善点が洗い出された。